神戸市青少年会館主催事業

KOBE 居場所フォーラム 2025

実施報告書

開催概要

KOBE 居場所フォーラム 2025　～日本のユースステーションを語る～
主催：神戸市青少年会館
企画：特定非営利活動法人　こうべユースネット

目的：青少年の居場所づくりや地域における青少年育成活動・支援活動に関わる育成者が集まり、居場所についての価値観やユース世代とのかかわり方についてそれぞれの意見を持ち寄り話し合うことで、今後のユースワークの実践について探求を深めました。

日時：2025 年 1 月 25 日（日）13：00～17：30
会場：神戸市青少年会館
〒650-0044　神戸市中央区東川崎町 1 丁目 3 番 3 号ハーバーセンター5 階
対象：神戸市内の居場所づくり（施設）スタッフ(職員・ボランティア等)
全国の青少年育成や支援活動に関わる方、青少年施設・教育関係職員等
青少年育成活動に興味のある方、中高生・大学生層・教員等　30 名

第1部 基調講演

〇講演者　青木　門斗
東京大学大学院教育学研究科　修士課程 1 年
〇演題　「若者にとっての“居場所“とは？」
「居場所施設の特徴」

青木さんの公演は、ご自身の活動経緯を紹介しつつ、「居場所」を取り巻く現代の議論と、ユースセンターの定義、そして「居場所」という概念を深堀する三部構成で展開されました。

―居場所づくりの現状と課題

青木さんは、こども家庭庁“こどもの居場所部会”が作成した「居場所づくりに関する指針」を基に、現代における居場所という言葉に関する議論について、以下の二つの大きな論点を提示しました。

① 居場所は多様な形態をとる

居場所の基準は多岐にわたります。ある施設の特定のスタッフさんとの関係性だけが居場所と感じられる場合があるように、施設自体が居場所とならないケースも十分に存在します。

（青木さん）居心地がいいと思う人がいれば、居心地よくないと思う人もいる。静かな場所のほうが勉強しやすい子もいれば、ちょっと人の声があったほうが勉強しやすい子もいるわけで、皆が主観的に居場所だと感じられる場所をつくることはほとんど困難です。

このため、ひとつの居場所ですべてを充足させるのではなく、いろんな居場所が世の中に存在し、それらがそれぞれの子どもに合わせて**補完的に成立**することで、トータルで全員に居場所がある状態をつくっていくことが重要であると解説されました。

② 居場所は主観的側面を含む

居場所が主観的側面を含むというのは、居場所（感じること）と居場所づくり（大人が届けること）との間にギャップが生まれてしまうことと関連して議論されてきました。最近よく使われる「子どもの声を聴こう」というのは、そこのずれをうめていくことを意図して、実践者の間で広まってきた言葉だといえます。

―ユースセンターの定義

ユースセンターには明確な定義がないと指摘し、その背景には歴史的な経緯があるとしています。

（青木さん）間違いなく言えることは、定義されてないということなんです。明確な定義がない背景のひとつとして、厚労省がやっている建物だったり、文科省がやっている建物だったり、様々な領域や目的、所管から出てきた施設が、ユースセンターとみなされてきたことがあります。

一方で、定義をあえて明確にしないことの重要性も強調されました。制度化が進むと学校教育に近づく側面があることを踏まえ、「学校に対抗するものは制度化されていないほうがいい。」「制度化されていないからこそ何でもありなんだ。」という価値観から、あえて明確な定義が避ける考え方も存在します。

―「居場所」を深める

「居場所」の概念をさらに深堀りするため、以下の３つの視点から考察が展開されました。

① 誰が「いる」のか
「過ごすことができていない人は誰なのか」という視点を持つべき。 居場所は不登校から始まった経緯があり、全てのこどもを取り込もうと活動されてきたが、目の見えない子どもやトランスジェンダーの子ども、外国にルーツを持つ子どもなど、マイノリティーの人々をどれだけ取り込めているかが問われている。
② 誰と「いる」のか
これまで居場所づくりで主張されてきた、支援者（大人）と子どもという**斜めの関係**に加え、**周囲のこどもといる（こども同士でいる）**ことについても、考える必要がある。子ども同士の関係性は、大人の想像を超えている可能性があり、「周囲の子どもとの間でどういうことが起こっているのか」「どういうふうに施設が見えてるのか」を立体的に捉えることが重要である。
③ 何をして「いる」のか
「何もしなくてもいい」と言われることが多いが、実際には、「いる」理由がないということが難しいのが現実である。例えば、施設で本当に何もしないと決めて座ってみても、5 分ぐらいで飽きてしまう。 その点、勉強は**「いる」理由として明白で、施設を訪れる動機になりやすい。**ところが、勉強している子供たちが増えると、「勉強しないといけないのか」という雰囲気を産まれるため、あくまで「いるための１つの方法」として認識することが大事である。

第２部　パネルディスカッション

〇司会　正脇 直光　神戸市青少年会館職員

〇パネリスト

・青木 門斗　　東京大学大学院教育学研究科　修士課程１年

・大西　雄太　　一般社団法人 Spice

・山中　梓　　公益財団法人よこはまユース

―パネリストの活動紹介

大西 雄太さん

ちばユースセンターPRISM では、地元の企業セクターを巻き込む「千葉モデル」の構築を目指し、地域全体で若者を育てる持続可能な活動を展開しているそうです。企業による「青田買い」を防ぐためにも、ユースワーカーなどの専門家が若者の実情を知り、対応する必要があると強調されました。

また、大西さん自身の壮絶なライフヒストリーに基づいて、独自の居場所論を語られました。大西さんにとっての「居場所」とは、**「自分が生きていてもいいなと思えること」**、すなわち存在そのものの肯定（人権）が重要だと主張されました。さらに、強いつながりだけでなく「ゆるやかなつながり」も大切であり、「疲れた」ときに休める「健康主権」を最優先すべきだとも訴えられました。

山中 梓さん

よこはまユースは、青少年活動支援や交流の場を提供する横浜市の外郭団体で、山中さんは、そこで施設につながれない子どもたちへのアウトリーチ事業として「校内カフェ」に取り組んでいるそうです。

「校内カフェ」では、生徒全員が無料で使えるカフェを学校の教員と共同で運営し、生徒に対しては身近な相談・交流の場を提供し、運営側に対しては学校の中の課題を発見する機会をもたらしている。山中さんは、多様な背景を持つ生徒が集まる場で、「先生でもない、親でもない、そういう曖昧な他者」として関わり、悩み相談だけでなく、生徒たちと畑づくり、就業体験、地域貢献といった活動も行っているそうです。

活動の課題として、国としての財政支援がないことや、学校からのニーズがないと始まらないことから、**「課題のある学校」にしかカフェが増えない傾向にある**ことを挙げられたほか、アンケートでは「1 人でいてもそっとしておいてくれる」という声が出たことから「そっと見守ることの重要性も感じた。」と語られました。

―クロストーク

① 地域連携の実現方法と意義

まず初めに、司会者（正脇）から地域とつながる具体的な方法についての問いかけがありました。

大西さんは、企業や地域と「一緒に楽しくやれることが大事」だと強調。

山中さんは、高齢化が進むこども食堂の運営者に高校生が「お手伝いしますよ」と協力することで、

世代を超えた新たなつながりが発展した事例から、既存の地域資源との「ネットワークづくり」が有効であることが共有されました。

青木さんは、「地域という言葉が難しい」とし、地域という概念の多様性を認め、「一歩踏み込んで人に出会っていくしかない」と、行動の重要性を強調しました。

② ユースの先（30 代以上）の居場所の課題

次に、大西さんから、ユースセンターの利用年齢制限（24 歳や 30 歳）を超えた「ユースの先」の問題が提起されました。大西さんは、自身の経験から、アルコール依存や孤独・孤立といった状況にありながら「ユースとして捉えられてない」見えていないユースに視点を向けるべきだと主張し、彼らが地域社会との接点を失い「無敵の人」化する社会の危険性を示唆しました。

山中さんは、ユースセンターの役割を、若者が最終的に自分の居場所を自分でつくれるようになるまでの「一緒にいる期間」と捉えている一方で、依存性の高い生徒に対して、それとなく自立を促す難しさにも触れていました。

また、司会者（正脇）から、30 歳以上のヤングケアラーといった層の支援窓口がないという現状が提起されると、大西さんはこれを「社会構造」の問題として捉え直しました。

最終的に、企業が居場所機能を失い個人化が進む中で、親の高齢化やダブルケアの問題に直面する 30 代以上の人々を社会が包摂できるようなシステムを構築することが喫緊の課題であると議論されました。

③ 「居場所」という言葉の存在意義

「夜の公園にいる若者など、属性が違う新規利用者がユースセンターに来た際の既存利用者との摩擦」という問いから、居場所が持つ**「排除の力」**について議論。青木さん、大西さんは、特定の居場所が誰かの場所であることは同時に誰かを遠ざけている側面があるとし、この摩擦に向き合う必要性を訴えました。

また、「居場所」という言葉が多用されること自体が、社会のコミュニティ喪失や孤立化が進んでいる証拠であり、最終的には「居場所という言葉がなくなること」がユースワークの目指すべきゴールではないか、という提言をもってクロストークは締めくくられました。

第 3 部　グループディスカッション

第 2 部で提起された議論を踏まえ、参加者それぞれが「日本のユースセンターに必要なモノ、場所、人とは？？」というテーマについてグループディスカッションを行いました。

編集後記

第 1 部における青木さんの提言や第 2 部における議論だけでなく、第 3 部のグループディスカッションでも居場所を運営していくにあたる資金の問題が挙げられるなど、現代の居場所づくりにおける様々な課題や社会的な問題が示唆されました。参加者からは、「活動を取り巻く環境を振り返るいい機会になった。」という声が出た一方で、それらに対する具体的な解決方法を見出すには至りませんでした。

今後は、居場所づくりの実践活動を持続可能なものとするべく、解決の糸口を見出すための議論が引き続き行っていくべきだと考えました。